

【ヤンデレ監禁】「お兄ちゃんを守ってあげる」執着幼馴染の狂った救済 ～薬で奪われた自由と、手錠で繋がれる監禁生活の始まり～

サンプル（一部抜粋）

「...体調大丈夫？
今朝、だるいって言ってただろ？」

「心配でお見舞いに来ただよ。
ほら、ベッドで眠っていていいよ。」

「薬だけちゃんと飲んで。」

（液体を飲み干す音）

「...いい子。
ほら、眠るまで傍にいるから。」

「...さっきよりも顔が赤いな。どうした？」

「身体がおかしい...？
俺に出来る事があるなら、手伝うよ。
どうすれば楽になりそう？」

「...俺、知ってるよ。
どうすれば楽になるか。」

「...ほんとだよ。
どうする？
楽にしてあげようか？」

「（嬉しそうに短く笑う）いいよ。
じゃあ...じっとしていてね。」

（ゆっくりと服を巻くし上げる音・お腹から胸を撫でる・ブラのホックを外す音）

「...じっとしていてね。」

「全ての危険からお前を守るにはどうすればいいか、ずーっと考えてきたんだよ。
お前は俺を幼馴染のお兄ちゃんとしてしか見ていないけど、
俺は...ずっとお前だけが好きだったから守りたかった。」

「...気付いたんだよ。
全部から守るには...俺の目の届く所で、俺の手の届く所で...守るしかないって。」

「...もう何も心配しなくていい。全てから守ってあげる。」